

平成 30 年度継続課題に係る継続評価書

研究機関 : 大阪大学

研究開発課題 : 次世代人工知能技術の研究開発
(課題 I 脳型認知分類技術の研究開発)

研究開発期間 : 平成 29 ～ 31 年度

代表研究責任者 : 村田 正幸

■ 総合評価 : 適

(評価点 19 点 / 25 点中)

(総論)

目標設定、サブゴールへの分解・統合、課題 I・II 間の連携を緻密に計画、運営し、計画した以上の成果を挙げており、十分に継続に値すると判断する。脳機能の解明に向けて着実に研究開発を進めてほしい。

ただし、精神疾患への応用に関する成果の見通しも含めて、社会に納得感ある成果を出せるかどうかは、今後も注視する必要がある。

(コメント)

- 脳機能の解明に向けて着実に研究開発を進めてほしい。
- 目標設定、サブゴールへの分解・統合、課題 I・II 間の連携を緻密に計画、運営しており、計画した以上の成果を挙げている。
- 十分に継続に値すると判断する。
- ただし、精神疾患への応用に関する成果の見通しを含めて、社会に納得感ある成果を出せるかどうかは、今後も注視する必要がある。

(1) 当該年度における研究開発の目標達成(見込み)状況及びアウトカム
目標の達成に向けた取組の実施状況

(5～1の5段階評価) : 評価4(評価点)

(総論)

研究機関の実績を生かして、認知モデルの構築、脳内処理の原理解明、実証実験のフレームワーク構築などで、計画どおりに目標達成し、一部は計画以上の目標達成を果たしている。

(コメント)

- 研究機関の実績を生かして計画を上回る目標達成を果たしている。
- 認知モデルの構築、脳内処理の原理解明、実証実験のフレームワーク構築など、課題について計画以上の進捗を得ている。
- 目標は達成し、一部はそれ以上の成果が出ていると思われる。

(2) 当該年度における研究資金使用状況

(5～1の5段階評価) : 評価4(評価点)

(総論)

課題Ⅰ、Ⅱの連携や次年度以降の設備活用を考慮して設備投資を増やすなど、支出調整によって実現性の高い計画を達成しており、研究資金使用状況として妥当である。

(コメント)

- 次年度以降の設備の活用を考慮した適切な執行である。
- 課題Ⅰ、Ⅱの連携も考えて設備投資を増やすなど、支出調整によって実現性の高い計画を達成した。
- 妥当な使い方と判断する。

(3) 研究開発実施計画及びアウトカム目標の達成に向けた取組

(5～1の5段階評価) : 評価4(評価点)

(総論)

課題Ⅰと課題Ⅱとの連携を図るという観点から、目標設定、実行計画が緻密に検討されており、目標達成に向けて十分な取組がなされ配慮もされていると評価できる。

(コメント)

- 課題Ⅰと課題Ⅱとの連携を図るという方針は適切な判断。
- 実施計画の具体的な内容が良く検討されている。
- 指摘事項に対して、実効性のある計画を立て、目標設定、実行計画も緻密である。
- 目標の達成に向けて十分な取組がなされて配慮もされていると判断する。
- 精神疾患への応用に関する成果の見直しを含めて、社会に納得感ある成果を出せるかどうかは、今後も注視する必要がある。

(4) 予算計画

(5～1の5段階評価) : 評価4(評価点)

(総論)

予算が減額された中で、重要項目に集中的に投資を行う予算調整を行い、計画達成の裏付けを確保しており、予算計画として妥当と評価できる。

(コメント)

- 予算の減額という中で重要項目に集中する予算計画を策定している。
- 課題間連携も考慮した予算調整を行って、計画達成の裏付けを確保している。
- 予算が減額された中で妥当な計画と判断する。

(5) 実施体制

(5～1の5段階評価) : 評価3(評価点)

(総論)

テーマ間連携、ビジネスプロデューサーの活動を含めて、妥当な実施体制である。

(コメント)

- 総合ビジネスプロデューサー/ビジネスプロデューサーの下で取り組んでいる。
- テーマ間連携、プロデューサーの活動を含めて、適確に機能している。
- 妥当な実施体制と判断する。